

## 夜鳴きうぐいす

ここは海に近い森。もうすぐ夜明けです。

漁師が小さな舟に乗ってやってきました。漁師は、夜ごとに美しい声で鳴く、ナイチンゲール（夜鳴きうぐいす）の声を楽しみにしているのです。今日もナイチンゲールがどこからともなく飛んできて、美しい声で歌いはじめました。

そこへとつぜん、何人もの人々がやってきました。この人達は、お城からやってきた、中国の皇帝の家来たち。「ナイチンゲールの歌が聞きたい」という皇帝の命令で、ナイチンゲールを捕らえに来たのです。病気の皇帝のねがいだと聞いて、ナイチンゲールは、お城へ行って皇帝のために歌うことにしました。

お城では大勢の人々が待っています。皇帝が登場し、ナイチンゲールが皇帝の前で歌います。なんと美しい声、美しい歌でしょう。皇帝は感激して涙を流し、病気も治って元気が出てきました。皇帝は「ほうびをやらう」と言いますが、ナイチンゲールは、「そんなに感激していただけるなんて、それだけでじゅうぶんです」と、ほうびを受け取りません。

そこへお客が到着します。やって来たのは外国からの使いの人々でした。外国の皇帝からの贈り物だと言って、機械仕掛けのナイチンゲールを持ってきたのです。使いの者が操作すると、機械仕掛けのナイチンゲールが歌います。「おもしろい。よ

し、聞きくらべだ」と皇帝があたりを見回すと、本物のナイチンゲールはもういなくなっていました。

ナイチンゲールがいなくなると、皇帝の病気はまた重くなってしまいました。皇帝の枕元には、なんと、死神があらわれます。死神は皇帝の冠や刀をうばって、やりたい放題です。皇帝は死んでしまうのでしょうか。

苦しむ皇帝のもとへ、ナイチンゲールが飛んで戻ってきました。ナイチンゲールは死神に向かって、必死で歌います。すると死神もその歌に感動し、ナイチンゲールに逆らえなくなつて、追い払われてしまいました。皇帝の病気はみるみるうちに治り、また元気になりました。お礼を言う皇帝に、ナイチンゲールは「あの時流して下さった涙が一番のほうびです」と言い、それから毎晩、皇帝のそばに歌いに来る約束をしました。死にかけていた皇帝がすっかり元気になって「皆の者、おはよう」と言うので、お城中の人々がびっくりしました。



## イオランタ

ある山の中の小さなお城に、イオランタというお姫様が住んでいました。イオランタは生まれときから目が見えないのです。しかし、イオランタのお父様のルネ王は、イオランタが自分だけ目が見えないことを知ったらどんなに悲しむかと思うとかわいそうで、「目が見えない」ということを知らせずに育ててきました。そして絶対にイオランタにそう気づかせないように、お城中の人々に約束させていたのです。ですから、イオランタは、世界中の人々が自分と同じように、目にたよらずに、世界を感じて生きているのだと思っていました。そして、お城の人々のやさしい愛につつまれ、ひっそりと静かに暮らしていました。

絶対に外の人々がお城へ入ってこないよう、ベルトランが見回っているところへ、ルネ王の使いのアルメリックが登場します。王と外国からきた医者エブン=ハキアがもうじき城に到着するという知らせを伝えに来たのです。

ルネ王はイオランタの目を診察してもらうためにエブン=ハキアを連れてきたのでした。エブン=ハキアは、「姫が自分の目が見えないことを知り、治したいと思わなくては治療はできない」と言います。しかしルネ王は、イオランタに本当のことを言うことができず、悩みます。王は、イオランタを悲しませ

たくないのです。

そんな中、お城の庭へ、ロベルトとヴォデモンが迷い込んでしまいました。実は、親同士の約束で、ロベルトはイオランタと結婚することが決まっていたのですが、ロベルトは見ず知らずのイオランタでなく、マチルダという女の人が好きなのです。そして美しい姫イオランタを見て、ロベルトでなく、ヴォデモンがたちまち恋に落ちてしまいます。ヴォデモンはイオランタと二人きりで話をしました。

「美しい姫。今日の思い出に、赤いバラをください」

目が見えないイオランタには、色がわかりません。ヴォデモンに白いバラをわたしてしまいます。

「赤いバラと言ったのですが…」

ヴォデモンははっとして、「この姫は目が見えないのだ」と気づきました。

ヴォデモンはイオランタに、目が見えるのがどんなにすばらしいか話し、世界には光があるということをおしめようものは涙を流すためにあるのだとおもっていたイオランタは、心の底からおどろきます。「わたしも光を見てみたい…！」

イオランタを探していたお城の人々が、庭にいるイオランタ、そして迷い込んだヴォデモンに気づきました。イオランタが外の男に会い、話をし、そして光について知ったと聞き、ル

ネ王とお城の人々はあわてます。がっくりするルネ王に、医者  
のエブン=ハキアが「うそでかくすより、<sup>しんじつ</sup>真実が望みをもたら  
します」と話すので、ルネ王も本当のことを話す覚悟を決めま  
した。

「イオランタ、お医者様と目の治療をするか？<sup>ひかり</sup>光が欲しい  
か？」

「お父様の命令ならば…」

エブン=ハキアが「<sup>ひめ</sup>姫が自分で<sup>ひかり</sup>光を求めなければ<sup>ちりょう</sup>治療は成功  
しない」と首を横に振るので、ルネ王は、<sup>こんど</sup>今度はヴォデモンへ  
質問しました。

「お前は<sup>しろ</sup>この城に入<sup>は</sup>ってはならないことを知っていたな？  
<sup>おきて</sup>掟を破<sup>やぶ</sup>ってここへ入<sup>はい</sup>る者は<sup>しけい</sup>死刑になるのだ。」

「<sup>かた</sup>あの方を<sup>しけい</sup>死刑に？」とあわてるイオランタ。

「<sup>まえ</sup>そうだ。だがお前の<sup>め</sup>目が<sup>なお</sup>治るならば、<sup>ゆる</sup>許すことにしよう」

「<sup>いしゅさま</sup>ああお医者様！わたしは<sup>かた</sup>あの方のためにならば、<sup>くる</sup>どんな苦し  
<sup>ちりょう</sup>い治療も<sup>う</sup>受けます。私の<sup>め</sup>目を<sup>なお</sup>治してください！」

ヴォデモンのために<sup>けっしん</sup>決心をしたイオランタは、<sup>ちりょう</sup>治療を受ける  
ため、<sup>とも</sup>エブン=ハキアと共に<sup>へや</sup>部屋へ入りました。

イオランタがいない<sup>あいだ</sup>間に、ヴォデモンはルネ王へ「あなたの  
<sup>むすめ</sup>娘イオランタと<sup>けっこん</sup>結婚させてください」とたのみました。しか  
しイオランタはもう、<sup>つま</sup>ロベルトの<sup>き</sup>妻になることが決まっている  
のです。するとそこへ<sup>もど</sup>ちょうどロベルトが戻ってきて、「わた

しはイオランタでなく<sup>あい</sup>マチルダを愛しているのです」と告白し  
ます。<sup>ゆる</sup>許されるはずのない<sup>こくはく</sup>告白です。しかしルネ王は<sup>こくはく</sup>ロベルト  
をゆるし、<sup>けっこん</sup>ヴォデモンの<sup>う</sup>結婚の<sup>い</sup>ねがいも受け入れたのでした。

さあ、イオランタの<sup>ちりょう</sup>目の<sup>お</sup>治療が<sup>もど</sup>終わって戻<sup>もど</sup>ってきました。エブ  
ン=ハキアが、イオランタの<sup>ほうたい</sup>目の<sup>と</sup>包帯を取ります。イオランタ  
は、<sup>き</sup>木を、<sup>はな</sup>花を、<sup>そら</sup>空を見ました。そしてお父様を、<sup>とうさま</sup>ヴォデモン  
を見ました。<sup>せかい</sup>世界はなんと<sup>うつく</sup>美しいことでしょう。<sup>しろ</sup>お城の人々  
も<sup>ひかり</sup>みな<sup>かん</sup>光<sup>しあわ</sup>やいの<sup>むね</sup>ちの<sup>むね</sup>すばらしさを感じて、<sup>しあわ</sup>幸せで胸がいっ  
ぱいになりました。



ヤニス・コッコスが書いた舞台スケッチ